

(2014年11月27日講演)

5. 士幌町におけるバイオマス事業の展開

嘉藤牧場社長 嘉藤淳介講師

まず、嘉藤牧場の概要を説明する。搾乳頭数が現在 180 頭ぐらいおり、総頭数で 500 頭前後の牛がいる。バイオガスプラントに投入している部分は 180 頭分の搾乳の部分だけで、大体 1 日 18 トン～20 トンの糞尿を処理している。

お手元の資料は、「士幌町におけるバイオマス事業の展開」ということで、士幌農協が独自に作っているスライドである。

収支であるが、先ほど井戸委員からお話のあったとおり、50kW～64kW 発電して、FIT 制度の活用により、月に大体 160～170 万円程度の収入がある。私達がやっている施設が農協リース事業に依っているので、リース料、レンタル料ということで支払いをしている。それが年間大体 1,000 万円近くに上る。そのほかに、施設のメンテナンスや CHP 発電機のメンテナンスにかかる費用が大体 500 万円くらいかかるので、利益は年間 500 万円ぐらいである。

今まで当牧場では、糞尿処理として、出た物を固液分離して、液体も固体も畑に撒くことをしていた。したがって、処理が楽になったなどということはありません。だが、何故、私がバイオガスプラントをやりたいか、話はそこへ戻っていくが、中学校 3 年生のときにバイオガスプラントが士幌町で初めてできた。そのときにいろいろな話を聞いて、高校 2 年生のときにアメリカへ行き、そこでバイオガスプラントを見た。日本と全然違うものであった。牧場の中ですべてが循環している。液体もそうであるし、電気も、ガスも、熱も、牧場の中で全て循環している。

それを見たときに、日本でこのような大規模なことはできないが、自分の牧場で何ができるかと考えた。最初に思ったのが、熱を利用した冬場のハウス栽培である。次に、思いついたのが敷料のリサイクル。敷料も、あと二、三十年後になると、潤沢に手に入るか疑問である。北海道の小麦の作付面積が少なくなるとか、木質が少なくなるとかで、確保が難しくなるような情勢になってきている。とりあえず、その 2 つを考えた。それを実現するために、まずバイオガスプラントを入れたということである。

バイオガスプラントを実際やってみて、私がやりたいことの幅がもっと広がった。バイオガスプラントを持つということの意味は何か。エネルギーを自分で生産できるということである。よく考えてみると、アラブの石油王だとか、ロシアの天然ガス王だとか、それと同じようなことができることになる。そう考えると、とてつもないことと思えた。

その次に、それだけエネルギーがあるのだから、では、何かをしてみようかと考えた。考えたのは、マンション、介護福祉施設、学校など、そういう場所で使いたいなというこ

とである。

しかし、ガスをかなり遠くまで運んだりとか、今の現存施設に運んだりすると、結局、輸送コストが大きくなってきて、ガスの値段も高く設定しなければならなくなる。それは本末転倒の話でないか。発電して売電するといっても、北電自体がもう買取りに難色を示し 64kW で限界と言っている。もっとガスは造れる。頭数もふやしたいが、そうしたらガスが余る。持っていくのにコストがかかる、このような状況である。

そこで、家の横に老後の福祉施設を建てようと思った。北海道の人向けではないが、本州の人向け、東京や大都市生活者向けの老後の福祉施設を建てて、そこに畑を作って、採れた物を食べ、バイオガスプラントの液肥を使ったりすることを考えた。北海道では、冬場は何も採れないが、バイオガスプラントがあれば、老後の小遣い稼ぎになるし、製品の販売も可能である。

その施設自体も、全てバイオガスで動かす。ガスを使い、電気を使い、熱を使う。福祉施設となれば、運営に要するエネルギーコストが巨額になるので、その部分をバイオガスで補えば、地域を活性化するとか、住民を増やすとか、そういうことも可能なのではないかと思う。

私は子供が好きなので、孤児を預かったりする児童福祉施設を造って、小さいときから農業を教えることもできる。私は農業に大きな誇りを持っている。日本人は、酪農を嫌い、汚い、臭い、重労働だとか、何故、そのようなことしか言わないのだろうか。アメリカでは、ファームを持っているということは誇りであり、一つのステータスである。大リーガーとかハリウッドスター、そのような人たちが、「おまえ、牛何頭もっているんだ」という話を平気でする。私は日本人がもつ酪農のマイナスイメージを払拭したいわけである。

そのような構想を基に、バイオガスプラントを中心にしたビレッジを作りたい。ヨーロッパでは、エコ的な村作りをしているが、日本バージョンで、循環型地産地消を自分の牧場で本当にやってみたいし、やらなければならないと思っている。北海道には豊かな観光資源があるが、それが十分に活かされておらず、見直してやっていけたらと思っている。

田邊主査

少し私のほうから追加的にコメントさせていただく。私は何故、嘉藤講師にぜひ話してほしいと思ったかということ、井戸システムが入るビフォアの話であるからである。アフターは次にお話いただく今村講師の事例である。

嘉藤講師の話が非常に有効なのは、エネルギーを自分のものにした場合に、どのような世界が広がり、誇りを持った産業を作れるかという話をしてくれたことである。先ほどの話にあったが、彼には悩みがある。サンエイ牧場のように 1,400 頭の牛がいて 300kW の発電ができれば、造幣局のようにポタポタと金が落ちてくるのであるが、50kW では、せいぜい年間 500 万円の収入にとどまり、十分な手応え感がないということである。中島アドバイザーの話のように、もう半分のコストを余分に掛ければ 5 倍のガスが出るわけである。

そうならば、十二分にサンエイ牧場に負けない話になるというのが一つである。

もう一つは、先ほどのガスの話である。つまり、今は電気を造っても売れない。どうするかというと、北海道でガスを販売する際の決定的に有利な点は、プロパンガスが 350 円かかっているということである。本州の都市ガスはせいぜい 70 円ぐらいであるので、競争は難しいが、北海道はエネルギーコストが極めて高いので、売れるということである。逆に言うと、生産した瞬間に大きなプロフィットを手に入れられるということだと思う。

したがって、嘉藤氏の希望は、今のレベルよりも、もっと新しいアフターシステムを入れることによって、そのシステムを手にし、周りの酪農家も含めて、持続可能型の生活モデルを作りたいということだと思う。

嘉藤講師

TPP に関連して付言する。TPP が始まるか始まらないか分からないとしても、大きな酪農家の人たちの多くは、「TPP が早く来ればよいのだ、それが正しい市場原理なのだ」と言っている。逆に、畑作の人たちは、「あんなものが来たら、私たちは全員死んでしまう」という話をしている。私は士幌町であるが、士幌町の中でも、私を含めて 3 人が「酪農家は絶対残る」という話をしていて、TPP が始まったときに何をしようかということをお話している。

その中で私は、施設は動かないが人間は動くので、観光ビジネスではないが、バイオガспラントを活用して、人間を動かし金を産みだし、地域を安定させることができないかと考えている。もう一人の仲間は、加工販売で安定させようとしている。さらに、もう一人は、肉牛繁殖家であるが、肉を輸出したいと言っている。それ以外の方々は特に何も考えていないようである。

田邊主査

今の点は非常に重要で、ドイツのバイエルン地方では、畜産ランドが糞尿だらけだったのが、低レベルではあるもののメタンガス発電ができた瞬間に綺麗になった。綺麗になったから、フランスと並んで田園ツーリズムを行うことができた。だから、彼の言うように、畜産場の近くに行くと臭くもなければ何でもないということが起こった場合には、都会の人が癒しを感じるツーリズムに変わるということであろう。

嘉藤講師

そういうことである。つい先日、チーズケーキだとか、アイスだとかを作って海外進出・海外展開している海野氏という酪農家の方が、北海道に旅行に行って、「ああ、北海道はいいなと思った」と言っていた。

しかし、北海道は人の良さはなかなか伝わらない。ホテルに行ったとしても、どこか商店で買い物をしたとしても、あまりサービスは良くない。その点は、申し訳なく思う。今

は、北海道の観光業界の人も本当に危惧していて、サービスが悪くてリピーターが来ないのではないかと不安に思っている。

人間は、かなりおおらかで、良い人が多い。だが、それを伝える技術がない。だから、海野氏とも話したが、そういう技術でもっと力を付けていって、人間を呼べるようにしたい。観光で成り立つ、福祉事業で成り立つ、そういう北海道を目指していかないといけないと思う。北海道自体がもうすぐ限界を迎えるときがくると思う。TPP がもし始まったとしたら、生産基地だけでは、生き残りは絶対無理であり、アメリカに勝てない。だから、何をすべきかと言えば、ドイツは微妙かもしれないが、オランダやフランスといった国の農業を目指していくべきではないかという話をしている。

田邊主査

今の話で、ファームデザインと言われたが、ぜひファームファッションという要素も入れて考えてほしい。

それから、あなたから聞いて私がすごいと思ったのは、JA というのは農家を秋の収穫までに借金漬けにするということであるが、それに対して、士幌農協は、30年～40年前から、組合長が、そういうことでは駄目で、農家が借金漬けにならないように年間の資金繰りをシステマティックに回そうと試みているJAと聞いているが、どうか。

嘉藤講師

農協自体は、本当に自分たちのことを考えてやってくれている。畑を持つと、種を撒く時に金を借りなければならない、それでなければ種が撒けない。秋に収穫して借金を返すというシステムを、現在も多くの農協はやっている。

だが、士幌農協は、春に撒く種代をその前の年に取ってしまう。そのために、一回ぐつと詰まる時があるが、そこを乗り越えた農協である。したがって、「金を借り続けなければならない農業は商売として間違っているのではないか」という発想で、従来のやり方から脱却した農協である。今回、バイオガス事業を自分も含め4件やったが、その4件は農協施設をリースで使用する形で、私たちの持ち物ではない。

私の牧場で、年間、1億8,000万円、ほかの一番安いところで1億2,000万円、その借金を経営体に押し付け、経営体が借りてしまったら、ほかは何もできないのではないかとということになってしまう。プラントは農協がリース事業で貸してくれるので、長く返し続けられれば自分たちのものになる。農協に首根っこを押さえられているのではないかとと思われるかもしれないが、私たち士幌の農家は、そうは思っていない。